

香取遺産

◀①竹内東白墓（新里）②三面に刻まれた「竹内處士墓表」

幕末の志士を支えた

vol.173

砲術家 竹内東白

江戸時代の末期、明治維新に向けた動きとして尊王攘夷の機運が高まっていた頃、その動きを支えた人物を香取市でも輩出しています。

新里出身の竹内東白は幼少より学問を好み、夜遅くまで本を読みふけるような人物と伝わります。成人後、江戸の坪井誠軒のもとで蘭学や西洋医学を学びます。弘化3（1846）年、東白が24歳の頃、さらに医術の先端地である長崎へ向かいますが、途中大阪の緒方洪庵の「適塾」に惹かれ入塾。適塾は後に幕末・維新期に活躍する大村益次郎や福沢諭吉らを輩出した気鋭の塾です。東白はそこで学びつつ、種痘所の責任者になるなど活躍します。その後は京都の廣瀬元恭のもとに寄宿し、蘭学や医学を学びながら医者として開業します。

京都で開業後、嘉永6（1853）年「泰西王氏銃譜」を刊行します。これは蘭書の砲術書に解説をつけて翻訳したもので、以降「皇国火攻神弩図説」など砲術関係の書籍を多く刊行していきます。一方で、当時のアジアに対する欧米の侵攻や黒船来航などに対する危機感を抱いていた東白は、砲術家として幕末の志士達と活動を共にするようになります。攘夷派の中心人物であった梅田雲浜や頼三樹三郎とは特に交流が深く、提言などを行っていました。

先の二人が獄死した安政の大獄以降は表立った活動はできなかつたようですが、砲術関連の書籍は高く評価されています。並木栗水による碑文に「嗚呼君有奇偉非常之才」とあるように並外れた立派な人物として評された東白は、その活動から幕末の志士たちを支えたことがうかがえます。

東白の墓地は私有地のため、見学する際は問い合わせください。

